

147. 昭和61年度比叡山防災工事に伴う発掘調査のうち 西塔居士林研修道場付近の調査抄報

はじめに

比叡山山上諸堂を火災から守るために各堂宇にスプリングクラーを設置することになり、東塔の給水塔から各堂宇への導水管路布設が計画され、敷設予定地の緊急調査が昭和55年度からおこなわれている。昭和60年度は、西塔地区内2箇所、東塔地区内1箇所調査をおこなった。本報告においては、その中の西塔居士林研修道場地点のトレンチ調査について、概略を述べる。

位置と環境

本調査地点は、西塔釈迦堂から東南へ約130mに位置し、南東へのびる尾根の先端西側の平坦地に位置する。谷は東から西へ回り込んでおり、深い溪谷をなす。位置図からもわかるように、平坦地は尾根の中軸線からずれて南へ張り出しており、北側の部分は尾根が削り取られている。

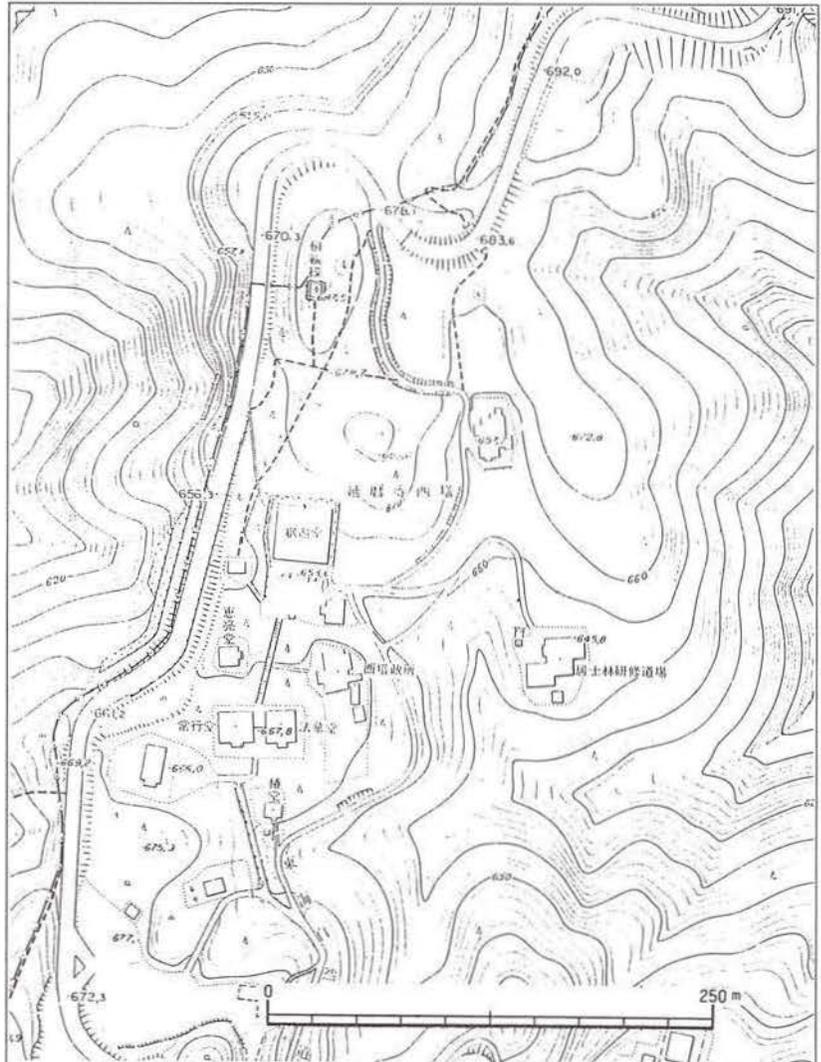
調査

導水管路布設箇所三箇所にトレンチを設定した。調査面積は35.5㎡である。遺物包含層と遺構面を確認すべく人力により堀削をおこなった。

層位及び遺構

居士林研修道場の北側に設けた第2トレンチ、第3トレンチにおいては、地表面からマイナス15cmで、地山の岩盤に達した。埋土は現表土のみであり、遺物包含層及び遺構面は存在しなかった。

第1トレンチは、居士林研修道場の前庭に南北方向、長さ19.3mにわたって設けた。北端から南へ3mまでは、表土直下に地山の岩盤が存在するが、以南においては遺物包含層を含む数層が層序をなして堆積してい



第1図 遺跡位置図



第2図 遺跡全体図

る。

堆積土の状況の一例をあげると、遺物包含層である第5層はトレンチ東壁においては表土直下にあるが、トレンチ西壁においては、表土と第5層の間には、旧表土と思われるよくしまった層を含む4種類の層が存在する。

遺物包含層については、三箇所が確認されている。最上層の第5層は灰茶色粘質土であり、東壁、南壁、西壁で確認されている。幅は10cm~20cmである。第10層は第5層より下にあり、灰茶色砂質土である。赤い焼土と炭を含み東壁にごくわずかに現われている。第14層は、灰色粘土である。よく締まり固い。西壁部分で少し掘下げたため図に現われているが、第1トレンチ大部分で検出している。第1トレンチにおいては、工事の影響を受けないものと判断して、第14層上面以下の掘下げは行っていない。

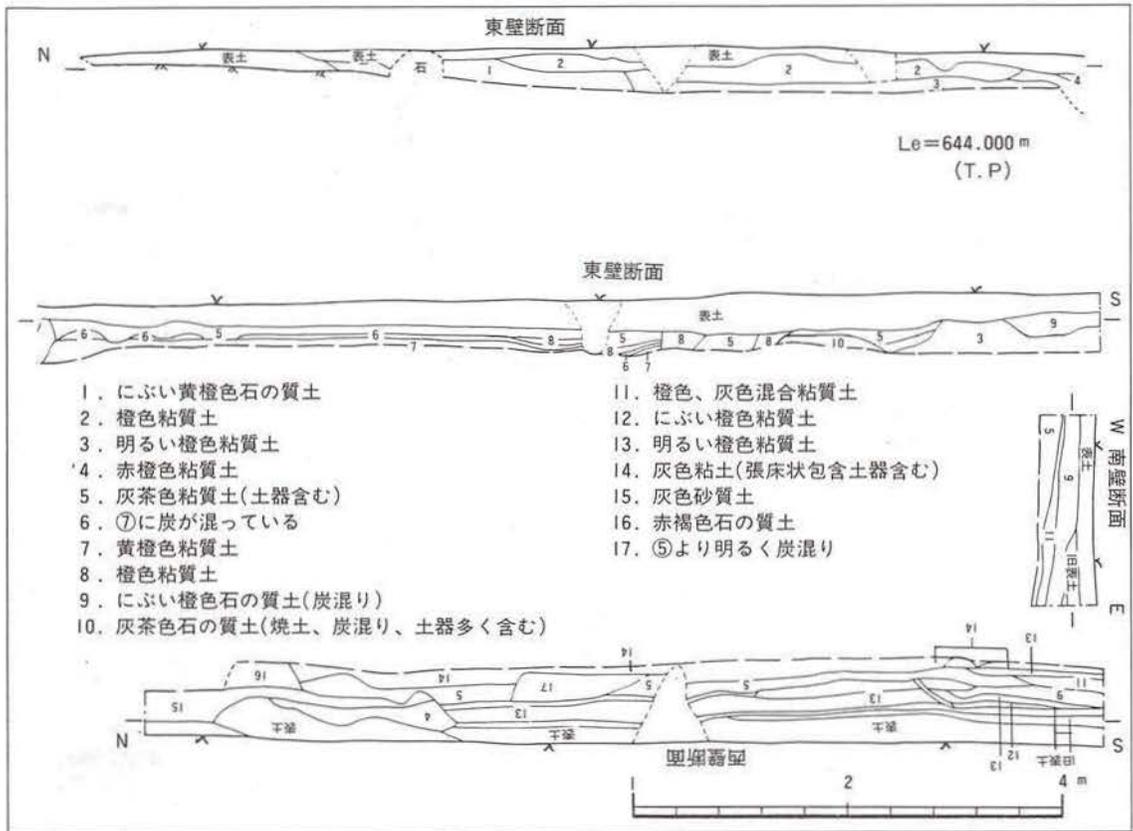
遺構については、整地層と思われる第14層を検出し

たのみで、ピット、土坑等はなかった。第14層上面レベルは東壁においては標高643.9m~643.7mで、西壁においては、643.65m~643.55mである。

出土遺物

第14層出土遺物 1は口縁部のひらく甕である。2は瓶の体部である。肩部と胴部に2条の沈線を有する。頸部から肩部にかけて降灰による自然釉が付着している。7は壺の底部である。底部外面に糸切り痕をとどめる。軟質で全体に磨耗著しい。

第5層出土遺物 4は黒色土器碗である。内面のみ炭素が吸着している。口径は16.0cm(横)、器壁は薄手のつくりで、内面は非常に緻密な横方向のヘラミガキを施し、口縁端部のみ内外面ともにヨコナデ、外面は斜方向のヘラ削り調整がされている。5は黒色土器の甕である。内面に炭素が吸着しており、外面には媒がまばらに付着している。体部内面はヘラ削りされ、口縁内面下半に刷毛目が施されている。18は皿である。口



第3図 土層断面図

縁端部は外方に折曲げられ、先端は上方につまみ上げられている。底部外面のみ不調整、他はヨコナデされている。色調はにぶい橙色である。

第10層出土遺物 6は壺の底部である。硬質で底部外面に糸切り痕をとどめる。8は皿である。内面と口縁外面は刷毛により施釉される。高台は貼付けで外端面は面取りされている。底部内面及び畳付に容着痕がある。9は碗である。口縁内外面は刷毛で施釉される。見込みは露胎である。高台は貼付けである。10は碗である。口縁内外面に施釉され、見込みは露胎である。11は碗である。内面及び口縁外面は刷毛で施釉される。見込みは、蛇ノ目状に露胎を残しているが、露胎の部分に容着痕があり、畳付にも容着痕がある。軟質で釉の剥離が著しい。高台は貼付けである。

12は、皿である。内面の口縁と底部の境界に段を有する。外面底部は回転ヘラ削りされている。見込みと畳付に容着痕がある。高台は削り出して、全面に施釉されている。素地は灰色、釉はうす緑色である。13は碗である。素地は淡灰色で釉はうす緑色である。

14は杯である。口縁端部は外反している。15は碗である。浅手の碗で口縁端部は外側へ折返されて小さな玉縁をなす、内面と口縁外面は施釉されている。高台

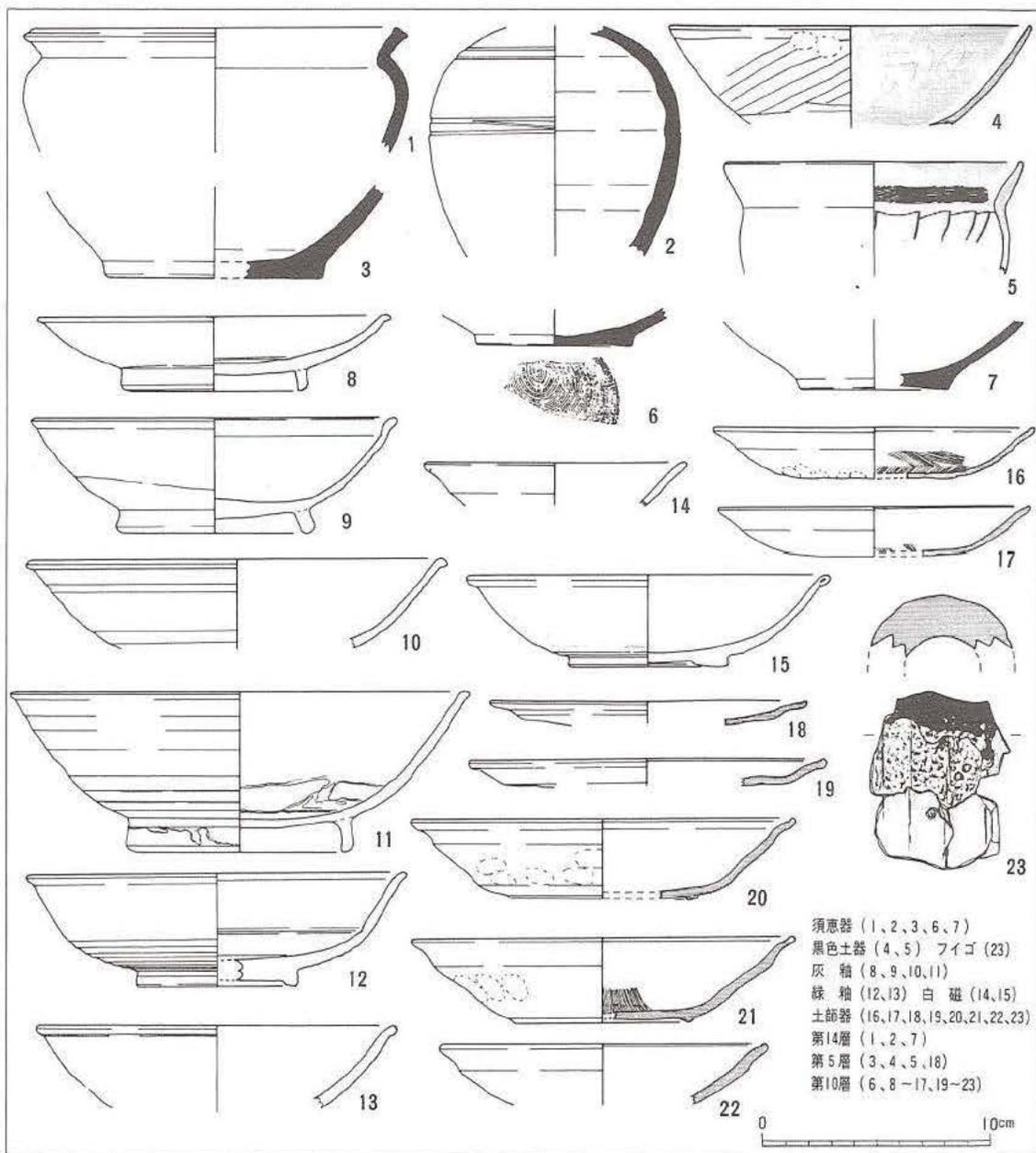
は蛇ノ目で、胎土は精良、色調はやや黄味を帯びている。

16は、皿である。口縁は強いヨコナデにより外反している。底部外面は不調整、内面は刷毛目が施されている。色調は、にぶい黄橙色である。17は16に非常に似た形態、手法、色調の皿である。19は浅手の皿である。20は皿である。口縁端部は強いヨコナデにより外反するが、上端はつまみ上げられている。内面及び口縁端部以外は不調整。高台は貼付けであるが、非常に退化し、用をなさないほどである。色調は橙色である。21は皿である。形態、手法とも20と似ている。高台は、貼付けであるが低く、断面三角形である。見込みの一部に刷毛目を施す。色調はにぶい橙色である。22は、皿である。口縁端部は強いヨコナデにより外反し、上端はつまみ上げられている。内面もヨコナデされている。色調はにぶい黄橙色である。

23はファイゴの送風口である。土師質である。先端は一部ガラス化しており、内外面とも二次焼成による器面の剥離が著しい。

まとめ

本調査トレンチは、幅が狭く、狭隘であったため、具体的成果は僅少であったが、上述の調査成果の中か



第4図 遺物実測図

ら、要点をまとめてみたい。

層序については地表下30~70cmにおいて固くしまった整地層(第14層)を検出した。遺物包含層はこの第14層と第14層より上層の第5層と第10層の3層である。

主な出土遺物を取り上げると、第14層からは須恵器のみが出土し、第5層からは須恵器、黒色土器碗・甕(ともにA類)、土師器小皿が出土した。第10層出土の灰釉碗は猿投古窯群黒笹90号窯式製品^(注1)に近似している。緑釉皿は、京都市洛北古窯跡群妙満寺窯^(注2)出土緑釉素地に近似している。白磁碗は、蛇ノ目高台で、

全体に浅手の器形である。他に土師器皿、フイゴ送風口が出土している。

(稲垣正宏)

注1 檜崎彰一、斎藤孝正 愛知県古窯跡分布調査報告(Ⅲ) 愛知県教育委員会 1983. 3

注2 百瀬正恒 平安時代の緑釉陶器 一平安京周辺の生産窯について一

第4回中世土器研究会資料 1985. 12